彼は渾身の長編に取り組んでいた。そして、時代の波動が終るころ、ようやく完成した作品が長編『風の貌』だった。

いま改めて読み返して見ると、そこにはただ一度の青春を力の限りひた押しに、強引とも思える筆力で書き切っていた。その力技はかつての野間宏の『暗い絵』や椎名麟三の『深夜の酒宴』を思わせながら戦後文学とは次元の全く異る文学の可能性を感じさせた。彼はこの表現の極限を志向した長編を完成させると、燃焼し尽したかのように長い沈黙と韜晦の時間の底に沈潜した。

その間、彼はあるときはルポライターとして、あるときは有能なエディターとして生きていた。――が、やがて、十年余の沈黙を破って、「ビッグ・バンの風に吹かれて」によって再起した。このSF小説風な導入によって書き起された短い中編小説はかつての彼の熱い魂の甦りだった。

現代の小説が限りなく大量消費の廉価な商品と等質化している時点で、この「ビッグ・バンの風に吹かれて」は、そうした流通回路を破壊しかねない衝撃力を備えた小説だった。

これは典型的な観念小説だろう。現代の小説が一方で無限に日常性の中に埋没して、日常を即物的に描くことによって「私」そのものを喪失している中で、「ビッグ・バンの風に吹かれて」はその対極であるところの「私性」の極点を究めようとした小説だった。

一〇〇枚という中編小説が大量消費の商品としての経済流通回路に非常に乗せ難い作品であることは、重田昇は充分に承知しているはずだ。ここでは従来の小説のリアリティが注意深く削ぎ落されて、ひとつに抽象化された「私」が描かれていた。連鎖する観念が抽象の「私」を語らせる。この小説はどこで作中の「私」と読者の中の「私」自身との観念を共有することが可能かというところに、重田昇の大胆で、それゆえ危険な文学的試行がある。

現代の豊饒の経済生活の中で、保守化してしまい、それに疑問を持つことさえ放棄してしまった読者に、これは危うすぎる賭だ。

しかし、不発に終ろうとも、文学史家の一人として、重田昇のこの創造への営為は腐蝕し、衰死しようとする現代文学への一撃として評価したい。それはこの巻に収録されている短編「夏薔薇」「投射器」についてもいえる。この二つの短編には詩を代行する言語と映像の見事な抒情歌が歌われている。

（国文学者・評論家）

中間項の不在

菊田　均

重田さんと最初に会ったとき、たくましい生活者として現れた。そのとき「おや」と思ったのは、それまで抱いていたイメージとはかなりへだたっていたためである。繊細な文学青年といった伝説が私の中ででき上っていて、それに照して「たくましい生活者」という意外な印象を持ったのだった。

私の側からだけいえば、「繊細な文学青年」がそのまま「たくましい生活者」になってしまったのが重田さんであって、だから私としては、重田さんには中間項が存在しない、ということになってしまうのである。

もちろん、文学青年から生活者へと変化するにあたって、当人にとって中間項が存在しないなどということはない。変化の過程は当然あったのであり、その過程を経てたくましい生活者となったにちがいないのである。そもそも四十歳を超えた文学青年などというのは、グロテスクな存在にすぎない。その意味では重田さんは、グロテスクでないまっとうな生活者であり続けているはずである。

今度久々に重田さんの作品を読んで、中間項の不在を改めて感じた。「ビッグ・バン」に代表されるような宇宙の高みが一方にあり、他方に恐ろしく繊細で内面的な私がある。そして、人間が生きたり死んだり、他人とぶつかり合ったりする中間項が欠けている。漱石の『明暗』なんかが一生懸命追及しようとした人間たちの世界――倫理というのだろうか――が欠けているのである。内面的な「私」と宇宙の高みが中間項なしで、そのままつながっているのだ。

十五年くらい前の私だったら、だから（小説として）ダメだなどと言っただろう。小説としてダメだ、